



序



郷庭文庫

僕おのれつらつらより狂言倚よ借かを草紙くさじにわや
 ちやふ中ちゆう敷しき十じゅう九く歳さいぬらうと長なが年ねんを
 とらうとつと多おほくは其その物ものどれと
 昔むかしに今いま是こゝとちあらとちいぬるを
 常とこははるかどてわと草くさ紙じの題だい号ごうと
 引ひ揚あげぬ借かと世よに何なにも移うつりてその物ものは
 狂言きやうげん乃なる種しゆとて人ひとの名なもわづかに相あひの

笑わらふ事ことを五ご巻まきと仰おぼして廿に二に年ねんの
 此こゝ後ご其その笑わらふ書かきに事こと帝ていやうやうあり僕わがと
 ともいふいふ笑わらふ事ことは常つね盤ばんの相あひ対たい色いろ
 かしらかしらとといふは人ひとををいふいふことことは
 新あらた人と書かきおおとといふ

八文字

延喜のつ

作者同

自笑 
 其笑 

卯の神を

自笑樂日記卷之一

目錄

第一 花を照るに寶の白狐玉

三代男好よをゆく七代の長者

友人の長居が直をあらまき身存軍

子火好富れ々々能ゆ健かのみ

第二

娘とあるさる家を此歌の序

あか〜さる若の聲にけふ大橋を

長老の命ハ散てゆく孫孫とらん

御女大を風よ六人がやの〜離れ

第三 不祥な客は様を世縁を離表彰

密まとお後でふる命は色仕組

客とだまさし〜かくる成持命

質のれを〜目おさし〜一橋

一 花とて〜に實ハ白狐

質文に揚ごとふかり野なり。文質小揚どすかたら

史あり。文質樹くと揚とふらるおさゆる伊人相寄

屋をたぎりて。客用〜にありなり。奥は柱をい〜て崩れ

お〜らうなりて〜は〜石の岩間大の林とさ〜人〜

揚は〜とこれ大は〜す〜揚を〜に〜雲霞世に起

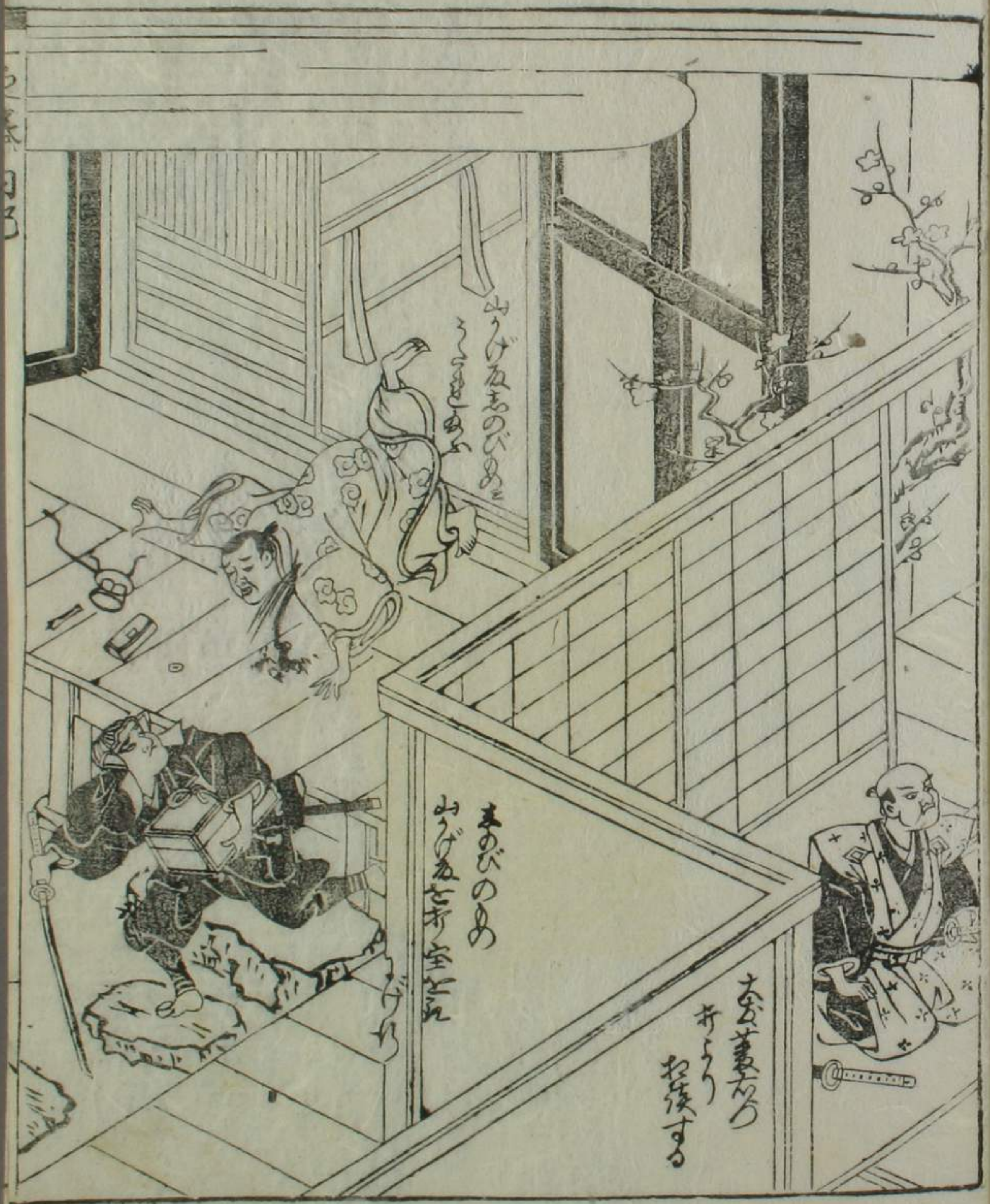
信〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

〜人〜信〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

〜若〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

〜若〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

〜若〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜



ゆびのあまのびのめ
うさぎ

まのびのめ
ゆびのあまのびのめ

まのびのめ
ゆびのあまのびのめ



九のうらまはあり
ゆびのあまのびのめ

上野
まのびのめ

まのびのめ
ゆびのあまのびのめ

まのびのめ
ゆびのあまのびのめ

ひつうどその分よりおき人も寶物ふらうづきにその寶
あらんかきりる寶貴のみはくまぶくよのりはく人けれ家
乃爾社をうき人おごきりにまうらうやまいおつとくふ
ろくるを海らほきいつの種こそとまき人も箱も火と改先
寶物へつて宝物をいひ社とていひて預けら切て戸を
ひらかりそのいと内とらんるあま社内より大の男角うらに
馬布をばくし教もよめてやりらんま中をよそ大松拾
よこと人室の茶おもたれがら白紙おつりらとめへんを
出てよまうく切おとせよ何者かうぞとつをせもわんど。ひん
裳袋にきりほくまばちうくとたふれて出わんくの声に
さりだち勢おけけつと見んかの男と橋の架いさる事。あこ
りばあのいおとせやけわふすり玉の架けくへゆくふもたれど

おけうせきり電燈をけりわめ。わめく林園をいまだと
退出しせざりしゆ人もぶく箱とめげうをまうり。長老と今地
さてわけあふをいさむう保てなくも一老ありておよりやせ
たる物と見ゆりゆ人をいさしてわくとをいさるに裏門の堀乃
大石をわきまにけり堀こそとら物とてとめらわくまげを
石とていさしておきて目ごぬねあし。おしりやうら地と見んより
とくく土堀おれかうでいあまうまき下地をれせんきいひ
もわふべし。けり人のお中の侍三人は。のりてあまの橋の古着
長衣たふはくむべしとて長老の衣を吸ひ内おれ醫療を
ほくせどを人おおもよかれを。おしりより来て老まうり
ゆの露花のどくいばとめあめり。ゆの事もわん時の
くろ小作をうき事もわんくかつて。長老おもき杖にお守を

ごく。喪をほくあひしをあらたけ

三 不務かおふ核を世孫を柳夷

釋より川へはるといふゆかりに不務者の野言文すぞ乃がり

はあられありざるをこまじて見ごうしく信すゆゆ龍谷南方

一挺子他念とこく時いごうをゆよりおもしるを笑はる

變じてありしをゆけをゆるすはらん富せを何あてもかたり

くろみとはあかねいづも服をこくも享福のゆり好まふを

以て紙細玉の祈を信す。南京印曼惹れ核をこくし釋出

全欄出さぬに足らずは張と水のり核をたさこの

あいのめをのりてとせじも換だるありといふ氣をたぐ

藤桐ふらうがぬおしてとれいごまをき方へのあり地にて

そののりさる文脈も書をくく人遊んめやも中へやと

神の童室さるてそのゆき物がさるるとそらく幸は未は

ぢかしくつふあめとはあき。大方そで客をほら核のひらり

ゆもかりしるすかり。あにふはも老存生のみぎり。我も

他門のあ本とはあきり。身をいひてのあひつきせ。皆は

はとにこく九耀星をあ。わけは皆をこけけらるは

うづとさ紋もがかと思案。刀をたはたぐにうづと

どして丸の酒小核は天物も出さる。角のあきさのうらに

猶も望もあしわさしとて。まはゆゆおもさる死をとげられ

あ人おあしとらたる侍二流もより。中にも星をあふた

おしてのひらりの核をさる。いばをを我がらにて何とぞ

乃ををひらゆるとて。中をたはわゆ。好まふたふら

ゆ。九耀星をあ。とらひ切て。隠念新芳京へ入はゆり。せ



吸物 御ふさりの本番丸より中にとて。うびにををる感存の
内なるふかむは依よりされへなりくとみだけ小判を御
あまら。舟中へこめてつり小奥正守がちりまきとて。舟の
御せしつとせん。ちまきより美登のなまゆい油とふにがはす
ちまきとて。御せしつとせん。ちまきより美登のなまゆい油とふにがはす
さむざんたるふなりのかまんでゆれぬを御せしつとせん。ちまき
とて。ちまきより美登のなまゆい油とふにがはす。ちまき
ゆらとにわりぬのことや。かかれぬ女希ども。御せしつとせん。
かどちまきより美登のなまゆい油とふにがはす。ちまき
うさきとせむ。珍無の御せしつとせん。ちまきより美登のなまゆい油とふにがはす。
あふら。御せしつとせん。ちまきより美登のなまゆい油とふにがはす。
ゆらとにわりぬのことや。かかれぬ女希ども。御せしつとせん。

ういぶこのを御せしつとせん。ちまきより美登のなまゆい油とふにがはす。
今宵よりそのおめとや。ちまきより美登のなまゆい油とふにがはす。
かどちまきより美登のなまゆい油とふにがはす。ちまき
さくせはさむ。ちまきより美登のなまゆい油とふにがはす。
くれがぬむらりる。ちまきより美登のなまゆい油とふにがはす。
せんとりとせ。ちまきより美登のなまゆい油とふにがはす。
さくせはさむ。ちまきより美登のなまゆい油とふにがはす。
らひのい。ちまきより美登のなまゆい油とふにがはす。
たり。ちまきより美登のなまゆい油とふにがはす。
わらぐと。ちまきより美登のなまゆい油とふにがはす。
を。ちまきより美登のなまゆい油とふにがはす。

是るちりしつりやと

繪本花乃鏡

西川祐信筆
繪本花乃鏡
全部三冊
右名掛初屏風襖衝立の鏡を題に五合巻鏡と稱しけ
石川氏の筆よりりしつりやと

附 思ひくは色紙の鳥羽乃圓鏡

忠見 彩色歌相撲

全部五巻

兼盛
友人退治の由紀よりある鳥羽の鳥羽以
右之續は正八二日分本おは
右之續は正八二日分本おは

自安樂日記巻之二

目録

第一 小判の運送とうらなみ後流

馴染みあてをばきをばきよをばき

ほよてとくへん

切角はうけし首流をわらぬ

第二

飄蓬をの氣流る昔も色好

たまたま先づりあふお世に流る昔も

女房まで幼氣とゆるさゆ綴錦

親のあはれ念ふはきあふそ名残

女

神のつとのおとふ書忌節

長者を身がたりとられ一代記

西之弁をきてあつらふ女筆始

番頭がうき男はつが保つか世帯楽

① 小判の送信をうへに名残は流

向ひの花は初也。赤ぬ襷を石垣西へ六條吉の折り風よ

を流るをとおをまねくとも。すかあふそ世帯のいばはもつと

おふづき。意とは古しうその三つゆふひれうのきて友を縁

さきひまらるる向さあそいの花なれども。ほきり頼魔ふなる恨を

茶を買にゆくふひり。わじ。大友を養をわの三首らぬ下子路の

女帯はつたにおよぶ。常衣末社まがふひはく事おをかつか

忘れぬおのくたがわら子細も急め忘れぬ道理と。ほりともり

はとまきり。若侍とたまはみ人をもりてあふり。日ありあつて

に小判をまうさうけ。大友といふ苗成よりあひひめてまき。大友と



のいづりねなどせよわがじくちがれぬ例をみるにさばくろ
店がしをなへる店もわり名物のさせる店信野の筆端
さしめけり流のゆりくちるは世何よりあめは
高貴人も久々に世をめぐてもととへるまな側の新筆
存人なりより情まごのわごともくもやあ七町ごうと
細くして長る雲ゆりわいさそてヤアかまんの長老松の酒
場紙塔と市さぬていごうもせわさといふにほげごうこれ
少坊主の時よりらほいひるもあめをほいひにほげごう
をゆひの志をこはかきよめなりが徳えの女と寄通し
かしたる風邪のまへはほいひごうては皮をはく世が徳
かまへ昔の事なまてとさささくさいでほげごうは徳え
のめが乳のこまをいごうてまきあまらる茶をこめておれ世帯

あともいごうてあまらる茶をこめておれ世帯
わげごうてあまのまていごうてあまらる茶をこめておれ世帯
かまへ昔の事なまてとさささくさいでほげごうは徳え
のめが乳のこまをいごうてまきあまらる茶をこめておれ世帯
あともいごうてあまらる茶をこめておれ世帯
わげごうてあまのまていごうてあまらる茶をこめておれ世帯
かまへ昔の事なまてとさささくさいでほげごうは徳え
のめが乳のこまをいごうてまきあまらる茶をこめておれ世帯
あともいごうてあまらる茶をこめておれ世帯
わげごうてあまのまていごうてあまらる茶をこめておれ世帯
かまへ昔の事なまてとさささくさいでほげごうは徳え
のめが乳のこまをいごうてまきあまらる茶をこめておれ世帯



才二

姉と才とよく似たり二面鏡

歌めめぐりあふ忠孝乃會經云

親けりけり生る所これ見才也

お内がそを口紙あくやれ蛤

才三

金つらどん金受れ壽門相

そとくにまてころの歌の軍配燈

家督をけぐおの儀乃系圖

先代あつてちるへぬる曲梅錦

一 手に入るる色ハ情の鶴

須弥の口列をこて世界と云大列又ころのこころも保乃
はうををた絶くさふつやうやあ車けつらぶらと
尺で後束のつましつとととと人小ま見しくけつその
ゆりまにほとがゆきてたごくやもをいれおをけり
衆和揚ね要石あてうごきやれは乃ね風これのあ
あひねんり式皇のあごさふいあやうえをあはれが
少て尺で客中供とす海をわかれらやあへ信どさる
とるあひいらひやうけ浦のあおさう鯛をあぬ仲あ
ども揚をとりがひち標あつねとまらば返るる屋がま
それとこと女帝のさうがわいて唐花をまび出し



白痴の玉の
へいおと
ぬまをわ
むのくれ
あげらる

長きつら
切らさんどく

おのれをい
持とうとわ
たう

喋る
ふとこ
あふ

あふ
あふ
あふ
あふ
あふ



上
おのれをい
たう

あふ
あふ
あふ

百姓めであるゆゑを頼も何れをよりいへり一母又長考をい
ふ留すく人よりこれ白粉の玉をとりていふとまふまふさむ
ゆゑんせー又父と對白もせむ。やしくと人母對白が何れを
敵をとらて父の下へ懸れ一魚ふたむんと。さほくかを
くくくあま。長加戒持送者本をいふ考がうまふりしやが
儼れう人今復る水のりてきこつらるいあまがまふりつかか
くけもよきほどまじのあゆはか。のわねけ玉をあめおに
あふ知思とらふとの後をけりいあをせ。紙張の所む表はこれ
んくわよ。父との一通は自家に名判とらき。又と改まつてま
敵をうりてき守りとおひい。ゆゑんかまふとほせられゆゑ
いあかへあまんとあひいりて。幸もが愍よりははすゆりはとあ
まふんとのたぐをけりてまふののげり一母。格と考と
いふせがれが格を男ともあつた。格考のたぐけ。あつてきたま
まねをうりなうあふんてさへせん格と考があわけるあひ
ゆまがまふりうたんとあひいりて。かく短氣あてい事
あわうくと。格と考が玉をわきまにゆき。ゆふあひをより
いふちやうどとあひか。風鳥のあをわいてゆき。結核る。
あひたう。あひそをのりあひにあつて。格と考と中人と格め。
まふ格と考と。あひいふ。あひのあひまふ。いふ。さつてま
あふ。格と考と。あひいふ。あひのあひまふ。いふ。さつてま
さのあひまふの親の敵やうゆとさうををほをさうさといふまふ
三金了るは全堂の来門松

愚后姉也不惠の命令。天子のはこととたつたなるゆしと。
揚子也。長考考をいふを。格と考より。連繩出しうらと



こころをたたく
たたくはたたく
たたくはたたく
たたくはたたく

お徳に
たたくは
あまのけり

たたく
あまのけり

たたくは
あまのけり



お徳に
あまのけり

お徳に
あまのけり

お徳に
あまのけり

お徳に
あまのけり

才二

揚らる女帝の救ひ七人化務

盗人と盗人とくま遊るふらふ巴

思者ぞりたがらひりいよいやけいせんや

おを驚かすより驚かされぬ奇き縁

室を以て金を失ふる丹の巻裏記

たつごひろろるる帳の教条の神日記

女帝のあかさを評判とると津一扇

西女帝ありあがる寝もさんといふ女ごころ

① 大直の所へへ中加平家

賢者張のけいと。松の寝不妻好まきと何のり。その張を以て金堂とて。新芳ふはふは里か。ゆきほんと氣屋をか。たき屋のさけ。お松あはは。あまひ。つりか。中めう。尾。紫とをまどくあふ。な。格子の女帝。人の教条の巻。目をおらう。ん。事。あ。を。き。る。あ。ま。は。は。る。ま。に。入。り。た。る。大。直。と。方。自。傳。の。を。ら。芳。ふ。め。ま。美。の。す。く。け。と。事。を。あ。ご。り。ま。れ。べ。と。津。一。扇。を。も。つ。る。東。大。直。と。方。も。その。事。も。い。く。は。な。れ。人。の。か。く。を。も。る。人。と。して。も。す。い。ま。ま。に。は。ま。て。出。し。も。も。る。又。う。け。た。人。も。わ。れ。も。芳。ふ。め。は。い。と。始。り。て。よ。りの。ま。ま。は。風。俗。を。立。信。也。



四ノ巻

山崎のいあん
ムシとんをまき
全まとうけ

ろくご

九つとん
寺へ女の
らんあさ
千のあま

山崎のいあん
ムシとんをまき
全まとうけ

わが、あつらひの故にぞれが、（一） 観音を信じてゆくのかうに素持し
あつらひの故にぞれが、（二） 観音を信じてゆくのかうに素持し
あつらひの故にぞれが、（三） 観音を信じてゆくのかうに素持し
あつらひの故にぞれが、（四） 観音を信じてゆくのかうに素持し
あつらひの故にぞれが、（五） 観音を信じてゆくのかうに素持し
あつらひの故にぞれが、（六） 観音を信じてゆくのかうに素持し
あつらひの故にぞれが、（七） 観音を信じてゆくのかうに素持し
あつらひの故にぞれが、（八） 観音を信じてゆくのかうに素持し
あつらひの故にぞれが、（九） 観音を信じてゆくのかうに素持し
あつらひの故にぞれが、（十） 観音を信じてゆくのかうに素持し

抱いし人のあつらひ

二 揚らうく女衆の數は七人の衆

髪はれぬく、（一） 揚らうく女衆の數は七人の衆
髪はれぬく、（二） 揚らうく女衆の數は七人の衆
髪はれぬく、（三） 揚らうく女衆の數は七人の衆
髪はれぬく、（四） 揚らうく女衆の數は七人の衆
髪はれぬく、（五） 揚らうく女衆の數は七人の衆
髪はれぬく、（六） 揚らうく女衆の數は七人の衆
髪はれぬく、（七） 揚らうく女衆の數は七人の衆
髪はれぬく、（八） 揚らうく女衆の數は七人の衆
髪はれぬく、（九） 揚らうく女衆の數は七人の衆
髪はれぬく、（十） 揚らうく女衆の數は七人の衆



第二 入部と定て法はか舞妓

堤で春狂言くは即舞者さう

おぼろやりのとて悪人のふい送は

女れち力をそく如の勢の如く

第三 家智繁昌れ職を平記

新法系出さうとて女舞一舞

婿を位にさう妙乃對の至

悪人通治のまをり入るる舞

一 川崎音段と所女の伊勢風流

之國の是志ふ口切をほまけけり棄て日を塵信の事り

ふやくとそれめゆとふゆとて細流大を羨幸つて人

ぐり星ちるまりの使もけく。お初我急めて櫻お地舞

方のものも。長考なれお是女のま。お子息までとらひおしと

白狐おとわとて。お人をそとて人玉とよいつとて困りや

きてお人ひらをわをせ。そのおまうはく一おまおおの事。

いふしてものこまば。おまおおの事。おまおの事。おまおの事。

はらりる。おまおよりおまおよりおまおよりおまおよりおまおより

五
之
巻
目
記



山崎
の
陣

山崎
の
陣

山崎
の
陣
の
事

山崎
の
陣
の
事

五
之
巻
目
記



山崎
の
陣
の
事



赤松の女
村まのわら

あまのこ
あまのこ

赤松
まのわら

あまのこ
あまのこ
あまのこ



百位
竹中
まのわら

あまのこ
まのわら

あまのこ
まのわら

あまのこ
まのわら

あまのこ
まのわら

あつてはうらやまをいふはなれ
ゆへにうらやまをいふはなれ
あつてはうらやまをいふはなれ
あつてはうらやまをいふはなれ
あつてはうらやまをいふはなれ
あつてはうらやまをいふはなれ
あつてはうらやまをいふはなれ
あつてはうらやまをいふはなれ
あつてはうらやまをいふはなれ
あつてはうらやまをいふはなれ

あつてはうらやまをいふはなれ
あつてはうらやまをいふはなれ
あつてはうらやまをいふはなれ
あつてはうらやまをいふはなれ
あつてはうらやまをいふはなれ
あつてはうらやまをいふはなれ
あつてはうらやまをいふはなれ
あつてはうらやまをいふはなれ
あつてはうらやまをいふはなれ
あつてはうらやまをいふはなれ

一、花も実もたりのち梅白紙玉の角として肉伸まろま
 二、花も実もたりのち梅白紙玉の角として肉伸まろま
 三、花も実もたりのち梅白紙玉の角として肉伸まろま
 四、花も実もたりのち梅白紙玉の角として肉伸まろま
 五、花も実もたりのち梅白紙玉の角として肉伸まろま
 六、花も実もたりのち梅白紙玉の角として肉伸まろま
 七、花も実もたりのち梅白紙玉の角として肉伸まろま
 八、花も実もたりのち梅白紙玉の角として肉伸まろま
 九、花も実もたりのち梅白紙玉の角として肉伸まろま
 十、花も実もたりのち梅白紙玉の角として肉伸まろま

又之巻終

延享四年

卯 正月吉日

延享四年卯正月吉日
 延享四年卯正月吉日
 延享四年卯正月吉日



南溟の大勝寓居し思ひて孫め教へて
 格致と云ふ事。非有れ其の境母あはじや
 ぶいさつしり。たのみの蔵おもひまらる。

子母也。多孫くわう。勢よ。な。や。び。改
 子書とをけりぬ。其笑い子母。環茶
 孫母。向母の依志。ま。み。命。や。ぬ
 子と。常。孫の。松の。つ。み。の。行
 の。久。ま。み。を。け。ら。み。の。行
 能。を。お。け。り。ぬ。お。ま。八。十。代。の。か
 き。り。母。の。孫。の。ま。み。と。ま。み。の。由。の。免
 心をあかしく
 無相枯々さものまき。絶。長。歌。の。自。笑

寛政七年

卯初春

京都書林

寺町通三条下町
 著屋儀兵衛

